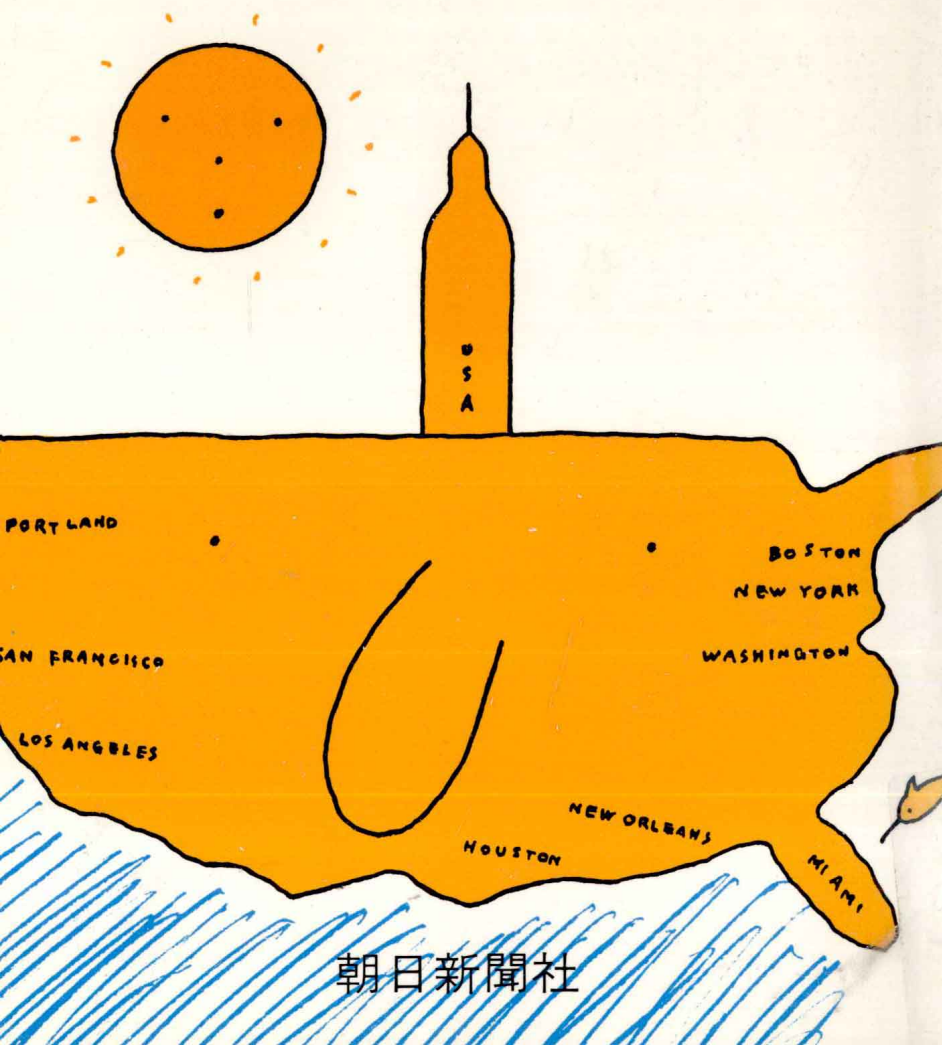


月と10セント

マンボウ赤毛布米国旅行記

北 杜夫



朝日新聞社

月と10セント

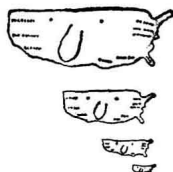
マンボウ赤毛布米国旅行記

北 杜夫



UNITED STATES

朝日新聞社



月と10セント

『マンボウ赤毛布米國旅行記』

定 価
750円

*

発 行

昭和46年 5 月30日第 1 刷

昭和51年 2 月10日第18刷

*

著 者

北 杜夫

*

発行者

朝日新聞社 角田秀雄

*

印 刷

凸版印刷株式会社

*

発行所

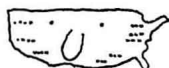
朝 日 新 聞 社

東京・大阪・名古屋・北九州

© Morio Kita 1971

0095-253880 0042

目次 | 月と10セント



第1章	作者大いに困惑すること	7
第2章	作者早くもダウンすること	27
第3章	たちまち破滅に瀕すること	40
第4章	本番となってまだダメなこと	56
第5章	ガンのおっかなさのこと	73
第6章	雑多さと整然さ	87
第7章	益々まとまらぬこと	105
第8章	終りまでツイてないこと	123
第9章	雌伏一年	143
第10章	月乞食を思いつくこと	162
第11章	月と狂気について	176

第12章 ニューヨークの休日 189

第13章 本番のケープ・ケネディ 196

第14章 むざんなる月乞食 210

第15章 昂奮と虚脱と 217

第16章 バカにつける薬について 236

第17章 働き手と怠け者 244

第18章 ついに躁期のうごめき 264

第19章 お月さま、しばしさようなら

第20章 まだ月と縁の切れぬこと 276

第21章 10セントと6ペンス 291

装幀
さしえ

長

新

太

月と10セント——マンボウ赤毛布米国旅行記

第1章 作者大いに困惑すること

私が幼いころ、日本は大きな戦争は始めていなかったものの、しょっちゅうどこかで戦をやっていた。世界のあちこちでも、いろんな国がそれぞれに拳をふりあげたり、トサカを立てたり、小銃や機関銃や大砲をぶつ放していた。戦車はどえらい地響きを立て、飛行機は現在のジェット機よりずっと魅惑的なプロペラの音響と共に急降下して、レンガよりでっかい爆弾を落つこととした。

西暦紀元一九六九年、人間がはじめて、一体なんの訳柄か怪体にも生れてきた地球という惑星を離れ、実に遙かな距離をとび、月と呼ばれる衛星に着陸した年に於ても、世界のところどころでやはり戦争が行われている。

かつ、世界は大ざっぱに言って二つに分れてきて、たとえ原子爆弾を破裂させずとも、底なしに不気味で、昔よりもますますおかかない。

とにかく、私が幼かったころも、いま私が中年に達した現在でも、人間たちは他の国に対して愛情や友好を示してもきたが、それよりも憎みあい疑ぐりあい、やっばり戦争を続けてきた。たとえ宣戦布告をしなくとも、腹の底では、もっと凄じくドンドンバチバチをやりたがっているかに見える。

私のわずかな半生くらいでは、人類はちつとも變つていない。否、地球上の他の生物には見られない文明というものを所有するようになってからも、その本質はいささかも變らない。正直いって、それが当り前なのである。なぜなら、人類がいわゆる文明人とやらになつてからも、たかが何千年ほどの短い期間にすぎないではないか。地球ができてからどれほどの星霜が流れたか。最初の原始生命が広漠たる海洋に誕生してから、いかに

の年数が経たことか。人類の先祖がオギヤアと泣いたのはわれわれ個人の時間的感覚では相当に古いが、いつて、こうした厖大な時間の中では須臾の期間にすぎぬ。

まして偉そうな名のホモ・サピエンスは、地球に生じた生命体の中で、時間的にはまだ赤子の部類に属する。

しかし、この現在の人間どもが、歴史というものを伝えられるようになってから、たった何千年かのうちに、その成しとげた業績はちょっと目を見るべきものがある。つまり、彼らはやはりいくらかの知能を有していたのだ。

そして、なかなか見事なことを考えたり、奇妙なものを作ったり、偉大といえるものを遺したりしてきた。それに併行して、これまたなかなか愚かなことをやらしたり、物を破壊したり、生物をぶっ殺してもきた。これが只今の地球の主人、つまり、われら人類の正体なのだ。

一体、なんでこんな当り前の事を書きだしたのか。そうだ、やはりありふれた戦争の話からだった。私が幼いころ、とそもそも私は書きだしたはずだ。

しからば、もう一度、私が幼いころ、日本はしょっちゅう小さな戦争をやらかしていた。とはいえ、私はまだ小さくて、その真相をろくすっぽ知りはしなかった。なぜなら、日本はその小さな島国の外で戦争をしていて、私のまわりにはまだ爆弾も降ってこなかったからだ。

「小さな島国」と私は筆のまにまに記したが、この「小さな」と「島」という意は、われわれ日本人にとって、好きにつけ悪しきにつけ、どうも重要なことのようなのだ。

ともあれ、私はまだ幼くて、子供で、少なくとも自分のまわりにはない戦争のことはまるで理解できずにいた。もちろん喜んで戦争ごっこはした。「軍艦遊戯」という可憐な行為にも夢中になった。この遊びは小学校へはいってからのことと思うが、学帽のかぶり方、ひさしの向け方によって、戦艦だとか巡洋艦だとか駆逐艦（或いは水雷艇と呼んだか）にわけられる。戦艦になった子供は巡洋艦には勝つが、駆逐艦に掴まると負けになるといったような単純なルールがあった。そして要するに、二手にわかれて鬼ごっこみたいなのをやるわけだった。が、私は駆けるのがのろくて撃沈されてばかりいた。

本物の職業軍人、義務でとられた兵隊さんたちも、私

ら子供は大好きだった。自分が実際に兵隊になって生死の境をさ迷うまでは、大半の子供は軍人が好きなものだ。なぜって、兵隊さんは勇ましくて誇り高きものではなかったか。おまけに当時、小さな島国の日本は世界の強国になりつつあって、本当に自分が兵隊になってドン・パンチパンチをやらかし、あっぱれ戦死をしてみたとて、なおかつ「万歳！」と叫び、苦しいながらもうつとりとした表情で、天国だか地獄だかへ行けた時代であった。それは御国のためであり、個人よりも家庭よりも国家が大切なのであった。(今だって世界のどこでも、多少の紆余曲折はあるにせよ、大局はそうだ。それどころか、ますます国家は厳然とかまえたがるようだ。)

しかし、そんなふうには私の生れた国、日本がどこかで小さな戦争を敢行していても、兵隊さんや軍艦や飛行機が大好きであっても、私が子供のころは、この世はまだ平和といえた。というより、私がまだ幼稚で、盲目だったせいだ。食べるには困らないどころか、自動車まであった家に育った私にとって、それは昭和のよき時代のごくのどかな歳月といつてよかった。(このことを、のちに、苦悩を求めたがる青年期に私はかなり恥じた。だ

が、仕方ないことではないか。有難がつておればよいと今は思う。まあ中産階級の上くらいに生れた私は、子供のころ高級ホテルの西洋風呂にはいったことはないが、夏には山荘の温泉風呂には入れた。ごく有難いことであった。現在の年齢の私は、貧乏人の辛さも、大金持の不幸をも、いくらか理解できる。私は中間の上の家庭に育ち、ほどほどに具合のよい身の上ではなかったか。それにしてもロクデナシに育ったものだ。)

そして、子供には子供のかすかな悩みや悲しみもあったにせよ、まずは平和でのどかといつてよい私の周囲には、——ちょっと待て、もう少し無理矢理にも話を月のほうへ持つてゆけ。さもないと終りまでこんなふうには横道へそれつけ、月どころか、ビー玉くらいしか出てきそうにないではないか。

三たび、私の幼いころ、子供のころ、わが家にはまだ「お月見」という風習が残っていた。そのとき、私と姉や妹は、昔から家にいた婆やに命ぜられて、すぐ近くにある原っぱにススキをとりに行ったものだ。おあつらえむきにひなびた穂をつけたススキはその時分の東京にはいくらかもあった。現代の車とスモッグと同じくらいにた

んとあった。それに加えて、コオロギたちが、仲秋そのものといつてよい音を、ススキの根元タタにひびかせていた。

それよりも子供心に嬉しかったのは、婆やが月見団子をこしらえてくれたことだ。餡も何もない白いだけの団子で、ひたすら清楚で、初秋の味わいがした。また梨とか葡萄などの果物。そして私自身の手で折りとってきたススキ。

それらが、日本の伝統に従って、実のところそれほどものものしくはなく、まあいい加減に、内庭に面した縁側に並べられた。その縁側に、わが家の大人や子供たちがひとしきり集まって、十五夜の月を愛でたのだ。――

それは本当だったろうか？ 内庭は小さく、すぐ建物があって塀があって、道ひとつへだてた向うの家にもやはり塀があって建物があって、おまけに高い樹木が茂っていた。その縁側からは夜空はほんの限られた視界にすぎなかった。はたして、あの縁側からほんの一刻にしろ、仲秋の名月が見られたものだろうか。

私は少しも覚えていない。記憶しているのは、婆やのこしらえた月見団子のほの白さと、季節の果物と、自分

たちが手折ってきたススキの穂の懐しい映像だけだ。

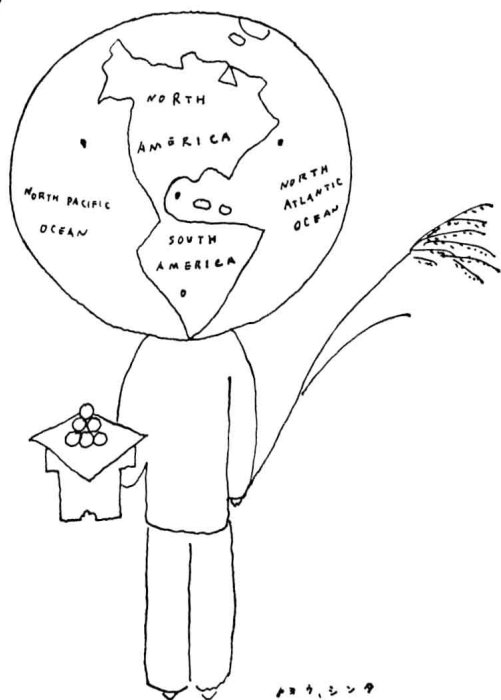
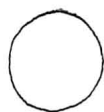
しかし、たしかに私の父もそのお月見の席にいた。ほんのしばしの時間だったかも知れないが、父は他の凡庸な家族にまじって、縁側に坐っていた。なぜなら父は、和歌をつくる歌人であって、大自然の中の風流なる事物、「雪、月、花」なども好んでいたからだ。

父は芯から万葉集を好み、なかでも柿本人麻呂を崇めていた。父は内心認めたくないらしいが、その人麻呂作といわれる和歌に次のようなものがある。

天の海に雲の波立ち月の船　星の林に榜ぎ隠る見ゆ

これは偉大な人麻呂の遺した歌としては、もっとも愚作といつてよいだろう。その音律には彼なりのものがあるとはいえ、その比喩はあたかも中学生なみといえる。しかし、この作をアボロ11号が月に到着したあとで見直すと、奇妙に鮮新であり、SF的にも感じられるのは、これまた人間の感情の比類なき単純さを表わすものであらうか。

ともあれ、歌人である私の父は、もっと比類なく純朴



で感性的で、かつ怒りっぽく性急で、ろくすっぽ月など見えるはずのないわが家の「お月見」の場にもノコノコ出てきたようだ。

次に、私の記憶に明瞭に刻まれている月は、第二次大戦に日本が徹底的に敗れたあと、箱根の強羅にある祖父の建てた古びた山荘でのことであつた。まさしく今度こそふんだんに、私は月を見ることができた。その頃、私はすでに子供ではなく、この世にまず役立たずの文学というものをひそかに志望する青年となつていた。

敗戦——このべら棒な第二次大戦、別名では大東亜戦争に於て、私の家は日本の家と同様ぶつぶれかけた。家は焼け、今から思い返せば幸いにも、私は日本の大半の人々と共に、飢えに悩まされる身となることのできた。月見団子どころか、池に映つた月の影にもかぶりつきたかつた。その敗戦から幾年か経つたころの話である。

強羅の山荘は人に貸していた。庭の一隅に、戦争中、父が仕事部屋として建てた六畳と三畳の二間きりの小部屋があつて、戦後かなり経つてようやく田舎の疎開先から戻つてきた父は、ふたたび毎年の夏をそこで過ごすよ

うになつた。避暑という言葉もまだあてはまらぬ時代で、父の晩年の最後の仕事のためと休養であり、家族の訪れることも少なかった。唯一の例外として、当時、医学部の学生だつた私は、夏休みの大半を父と二人きりでこの小部屋に過ごした。つまり、私が炊事もし、駅まで新聞をとりに行つたり、すべての雑用をするのだった。でっかい戦争は、愛国者であり戦争協力者であつた（私は七分どおりは誇つてこう書いている。）父の病院と家を焼き、二万冊を越えるその蔵書を焼き、わずかに老残の姿の父を残した。

人に貸してある母家はとうに古びて壊れかけていたが、父の勉強用に建てた小さな離れ家も、戦争中の粗末な建築のため、早くも傷み、黴が生えて雨漏りがした。とはいえ、日本はみじめな敗戦国で、暑い夏にこんなボロ小屋にせよ山中に過ごせるのは恵まれすぎた身の上といえた。父は戦後、食べるために矢継早に本を出版し、私の兄も自宅で医局の終つた夜間に開業して奮励努力し、私の家はもう生活に困らぬ状態に復活していた。

しかし、私は現代のカッコよい若者に比べれば、むしろくろしい着たきり雀の姿で、父の崇拜者の差入れもあつ

たが、ふだんは食物や酒に関しては苦学生なみといつてよかった。老境の父は次第に脂こいものを好まなくなってきたし、ときに貧困妄想を抱いた。肉くらい自由に買える時代となっていたが、私も父の嗜好のまま、半ば坊さんのように野菜ばかり食べていた。それでも、腹一杯に米の飯が食べられることは、終戦直後のことを考えると夢のようでもあった。

日本はコテンパンに戦いに敗れ、父も老いきり、私が少年時代の夏休みをほしほしに愉しく過ごした山荘の母家も他人に無断で借りられ、家賃もともに払ってくれぬのに家は当分返してはくれぬようだった。こちらが間借人のように、小さな二間きりの家にちこまて暮さねばならなかった。だが、箱根の自然だけは昔のままであった。杉の年を経た大木が、ほんの何年かまえ、赤茶けた砂漠のように焼きはらわれた東京の光景と比較すると信じられぬくらいに、戦火とも人間たちとも関りなく、どっしりと、庭の大半をうずめてそびえ立っていた。

そうして、父と二人きりで暮す一カ月余の夏の夜空を、月が、古代から数限りない夢と伝説とをわれわれ人

類に与えてくれた冷たくも死んだ地球の衛星が、あやまたず昇っては消えていった。

或る宵は、まだ夕光が明るいの、月は早くも東の空の山あいにかかった。なだらかな箱根の外輪山の谷間に昇ろうとするそのしばし、月は火星よりも不気味に赤いこともあった。それから次第にその抒情性を取戻し、なんともいえぬ青白さを濃い闇空に浮べ、杉木立の木梢ごしをゆっくりと移動してゆくのであった。

あるときは月は欠け、あるときは満ちた。そうした一つの天体の変化を、その輝きの強弱を、閑で時間だけはたっぷりある青年の私は眺め暮した。ある夜半は、ふと目覚めて、硝子ごしに、月が筆にもつくせぬ青ざめた冷光を、畳の上に流しているさまを見た。ある夜半は、月はどこまでも完璧に丸く、それこそ瑕^かなく、私はこの世ならぬその影を見つめ、夜気をあびながら杉木立の間をき迷い、なぜに満月がかくも明るく、木立の下闇がなぜにかくも漆黒であるのかとセンチな考えに浸りながら、長い時間を過ごしたりもした。

その月を、小さなボロ家に同居している人間、つまり老いきった私の父も同様に眺めていた。どれくらい歌人ら

しいので、私の何百倍もひたぶるに、どえらい心情をこめて眺めていたにちがいない。

幼いころ、子供のころ、私はずっと父のことを、あまりにおっかない人間として怖れ、敬遠していた。だが、その当時、私はすでに父の歌を崇拜するようになっていた。大げさにいえば、あたかも父が人麻呂の作品に對するがごとく。

自分の父のことを、こんなに大っぴらに讃めるのは確かに尋常な神経ではない。しかし、月、ルナとは、狂氣をも意味するのである。

その父、どえらい歌人らしい茂吉が、やがて死ぬ間際に、その生涯ずっと見つけつけてき、あるときは身悶えるようにして作品に結晶させてきた月を、そのでき損いの子、つまり私の傍で、同じ箱根の夏の夜半にじっと見守っている。その事實は、当時、どえらく下手糞な抒情詩などを作り、世間一般の青年よりもっと感傷的であった私を、よりいっそう感傷的にさせた。

そうして眺めやると、私の目に、月はひときわの幽玄さを増してゆくかのようにあった。同時に、その盈虚をも、私はなにがなし感じとれるような気がした。

こんなふうに、月にまつわるセンチメンタルな綴り方を、私はこれからも書いてゆくつもりであろうか。

お生憎さま、とんでもない。

実はおよそ二年前、私は「月への旅」というドキュメントを朝日新聞に頼まれ、昔からロケットは大好きだったから、どちらかといえば喜んで承諾してしまった。その当座は、自分の幼児性、或いはかつて理科系であった私の趣味を生かして何か書けると思ったからだ。

ところが読者よ、この文章が載っている新聞の日付をごろうじろ。一九七〇年一月、人間が月に到着してしまつてから、はや半年近くが経過している。それに、ここ一年間の、月旅行に関するおびただしい記事の群れ。宇宙飛行士の手記まで出やがる。

私のこの雑文は、あと半年以上も新聞に載せねばならぬ。いかばかりの遅延、あわただしい現世では時代錯誤に近いものがあるはすまいか。亀が兎を超越したというのは、お伽話以上のことだ。そもそも競争の途中で本当に眠ってしまうような擬人化された生物がいるはずもない。野兎は眠っていても敏感で、何かが近づいてくる